

## から騒ぎ——台湾における路地裏生活、住まう倫理、暮らしの環境主義

莊 雅 仲（名取雅航・藤木秀朗訳）

その向こうの、都会の片隅——彼らがやってきたその片隅——では、  
ドアの向こうから聞こえてくる口笛の曲や、レコードの円盤から広がる  
音楽が天気さえも変えることがある。凍<sup>フ</sup>てつくよう<sup>リ</sup>な寒<sup>ス</sup>さから暑<sup>ホ</sup>さへと、  
そしてクールへと。

本稿は、台湾の3つの都市の路地裏生活を考察するものである。路地裏における変わりばえの無い日々の営みを検証し解釈することによって、住まう倫理について考えることが本稿の目的である。住まう倫理とは、文化人類学者のティム・インゴルドによる概念（Ingold 2002）を借用したものであり、私はこれに修正を加える。本稿では、この住まう倫理という概念を都市化の著しい現代の文脈に位置づけながら検討することで、興隆しつつある暮らしの環境主義という考え方の土台を論じる。

この住まう倫理は、今日の台湾の公領域ではほとんど忘れ去られているが、都市環境主義が現在とはいみじくも異なる形で提唱された90年代には、中心的な議題であった。この環境主義の一形態は、20年ほど前に盛り上がった新しい区画整備の機運に関係していた。当時台北市長に華々しく当選し、新しい市行政を率いることになったばかりの陳水扁は、その地域のダイナミックな動きと手を取り合った初めての人気政治家だったと言えるだろう。新市政は、地域環境改造（地區環境改造）という名のイニシアチブを打ち出し、「地域の生活環境の改善」に役立つアイデアを持っていそうな自助団体に対し、認可と経済的援助を約束した。陳の再選が叶わなかったため、この方針は長くは続かなかったが、この政策に影響した機運はのちも衰えることがなかった。

本稿は、台湾全島から路地裏に及ぶまでの、新世紀におけるその機運の広がり方を考察するものである。本稿で扱う、人々の集合と交流の場である3つの路地裏の事例は、何でも無い身近な風景が並外れた生活世界へといかに変貌してきたかを示している。路地裏生活の民俗誌によって、研究者は都市の住民権をめぐるルフェーヴル的な闘争の最前線に立つことになる（Lefebvre 1991）。ここから、ありふれた風景の文脈にある暮らしの環境主義が明らかになってくるだろう。

## 巷子内、厝邊隔壁と文化の空間化

台湾の文脈では、人々が日常生活を送る路地裏の意味は、方言によって浮き彫りにされている。閩南語（台湾で最も話者の多い言語の1つ）の「巷子内」（内路地）は、路地裏空間という場所の文化的意味の重要性と曖昧さの両方を意味する。台湾の文脈においてこの言い回しには、内路地が文字通りにも比喩的にも秘密を抱えているという含意がある。しかし、そうした秘密は、例えばアメリカでよく見かけられるゲートで囲われたコミュニティとは違い、強制的に公の目から隠されているものではない。むしろ、それは、重層的な社会的関係と空間的配置に埋没したありふれた日常性のために、普段は目に見えずに隠れているものである。言い換えれば、路地裏が、持続可能な意味を持つようになったのは、侵入者を防ぐかどうかにかかわらず、そこに至るまでの路地が迷宮のように入り組んでいることが魅力となって隣人知人を引き寄せるからであり、しかしそれだけでなく、そこが、日々動き回る人たちにとって安心を得るための魅力的な居場所へと創造的な形で生まれ変わってきているからである。

閩南語の表現には他にも、空間性を含意するものがある。厝邊隔壁とは、文字通りに言えば、「家の端と反対側の壁」であり、人々の住む家と家の接触面を含意している。この接触面に起因する刺激と扇動をきっかけにして、人々はお互いに注意を向け、交流するようになる。したがって、厝邊隔壁とは、距離的近さと時間的即時性のダイナミズムを促すローカルな概念である。

私の専門である文化人類学は、そのような住居の近接性のダイナミズムの理論化にいくらかの洞察を与えてくれる。路地裏生活の詳細を論じるにあたり、まずは人類学で「文化の空間化」と呼ばれてきた理論の流れを論じておきたい。およそ20年前の1990年代半ば、人類学者の中から、従来文化の概念が全体主義的に縛られた事物のような実態として想定されていることへの疑問が持ち上がり、代わりに文化の場所形成と空間化に焦点を当てる研究が提唱された。アキル・グプタとジェームズ・ファーガソンは、論文「「文化」を越えて——空間、アイデンティティ、差異の政治」（1997）において、空間を想像することで、「そのような場所形成の概念的なプロセスが、生活空間——私たちの言葉で言う、場所と空間の関係——の経済的・政治的状況のグローバルな変化と一致するメカニズムを探究するため」の理論を構築する可能性が出てくると指摘している（Gupta and Ferguson 1997: 39-40）。「結局、場所とは常に、それ自体がロジックとなっている政治・経済的決定の文脈で想像されるものなのだ。したがって、領土性は、それが消える恐れのあるまさにその時に再刻印されるのである」（Gupta and Ferguson 1997: 40）。

ほぼ同時期に、人類学者のアルジュン・アパデュライは、ランドスケープの

トランナショナルな流動性に伴う地域性の生産について、似たような状況を考察している。彼が論じるには、場所は、人々の日々の暮らしに文脈をもたらすとともに、多様なランドスケープがグローバルに流通するという文脈に置かれている (Appadurai 1996: 188)。スティーブン・フェルドとキース・バッソが編集した『場所の感覚』は、そのような理論化の試みに対する民俗誌的な介入を代表するものだった。同著は、場所がどのように「知られ、想像され、求められ、所有され、記憶され、語られ、生きられ、争われ、闘争の目標にされている」のかを検証することによって、場所をめぐる多様な感覚を明らかにしようとした (Feld and Basso 1996: 11)。

場所と空間の力学に関わる多様な感覚を研究するそうした理論家の中でも、セサ・ロウは最も影響力があり、確固たる地位を築いている研究者である。1996年に発表した論文「文化の空間化——コスタリカにおける公共空間の社会的生産と社会的構築」において、彼女は「空間化」の理論を、「社会的空間内に社会的関係と社会的実践」を見出すことと定義している。

空間の社会的生産は、多種多様な要因——社会的、経済的、イデオロギー的、テクノロジー的要因——を含み、そこで目指される目標は、物理的な設定を物質的に創造することである。社会的生産という用語を唯物論的に強調することは、都市空間の歴史的出現と政治的、経済的成り立ちを定義する上で有効である。そうすれば、社会的構築という用語は、交換のような社会的プロセスに媒介される、空間の現象学的、象徴的経験を説明することに効果的に使用できる。(Low 1996: 861-862)。

ロウの著書『広場にて』(Low 2000) は、こうした理論化を例証するものであり、「両プロセスは、経済的、イデオロギー的な理由から空間の生産と構築がせめぎ合っている点で社会的であり、両者を理解することで、空間をめぐる地域的な摩擦がより広範な数々の問題を明らかにし照射することに利用されている様相が理解可能となる」(Low 1996: 862) ことを明らかにしようとしている。

新しい世紀になっても、ロウは場所と空間の人類学を研究し続けている (Low and Lawrence-zuniga 2000)。近年発表された編著書の中で (Nonini 2014)、彼女はさらに、「都市人類学はこの30年間に大きく変容し、都市に住む小規模な社会集団にだけ注目していた研究から、都市のプロセスと社会関係の多層的・空間的分析に変化してきている」と主張している。都市を静態的なコンテキストや設定として見るのではなく、「グローバル資本に翻弄され、流動的な場所と空間の複雑な相互関係から形成される都市地域」として捉えているのだ (Low 2014: 25-26)。ロウを代表として提唱されている、人類学における空間への転換は、都市の日常的な小さな場所を個別具体的な文脈で

理解しようとする本稿にとって理論的示唆となっている。この理論は、以下で示すように、また上述のロウやマニエル・カステルの観点からも論じられているように、都市住民の生活世界を、場所における空間の接触面と流動の生じる空間の接触面として理解する上で非常に重要である (Low 1996)。

こうした文化人類学の理論に加え、1950年代以降の戦後の都市地理学者は、都市の生活世界を探究する上で有益で具体的な情報を提供してきた。都市イメージ研究のパイオニア的存在であるケヴィン・リンチは、都市環境の心理学を研究した。彼は、その画期的な著書で、都市生活者に特別な影響をもたらす都市イメージの5つの本質的な要素——小路、へり、区域、結節、目印——を指摘している。私のこれまでの研究は、彼の小路とへりの概念の恩恵を受けてきた。リンチによれば、小路は都市の最も目立った部分であり、都市の人々の注意を都市特有の様々な場所の外観へと向けさせる。一方、へりは小路とは考えられていない直線的な要素である。「へりは主として2つの地域を隔てる境界である。それは側面の参照物だといえる」(Lynch 1960: 62)。ジェーン・ジェイコブスやウィリアム・ホワイトをはじめとした北米の他の都市研究者は、より詳細で具体的な都市空間の分析と記述により、やや一般化されすぎていたリンチの都市イメージを根拠づけた。両者とも、通りに注目している。ジェイコブスは、有名な通りのパレーという比喻によって、人々の視線をひきつける通りのダイナミズムを強調しているが (Jacobs 1992[1961]: 35)、それはコミュニティへの温かい眼差しへと変化するものである (Whyte 1980: 10)。ホワイトは通りの抗いがたい魅力を照らし出している。

往々にして、子供が通りで遊ぶのは遊ぶスペースがないからだと思われがちだ。だが、多くの子供は好きで通りで遊んでいる。私たちが出くわした最高の遊び場は、イースト・ハーレム101番通りの一画だった。問題もあったが、機能していた。通り自体が遊び場だった。通りに隣接する玄関前の階段や避難はしごは、見晴らしが良く、通りを見渡すのに最高の場所であり、母親や大人たちにとって極めて便利だった。

近所生活にとっての通りの魅力については他の研究者たちも認めてきたところである。ヤン・ゲールは、交流を促す通りの機能を分析したが、そこではビルの谷間の社会生活が、他の人々と一緒にいたいという人々の欲求と都市生活の基本的特徴を表しているという。ドナルド・アップルヤードのサンフランシスコにおける研究 (Appleyard 1981) は、交通量の少ないのどかな雰囲気が、通りで人々が交流したり友人を作ったりすることを促していると指摘している。

### 3つの路地裏、3つの都市の物語

本論文で考察する路地裏は3つの都市に位置し、台湾における現代都市空間の3つの主要形態の縮図を示している。その3つとは中心都市、郊外都市、中間都市と呼べるものである。例として扱うのは、台北、新竹、員林であり、これらの位置関係は図1に示す通りである。これらの都市を選んだのは故意であり偶然でもある。この20年間、私はこれらの都市に長期間住む機会に恵まれ、そこで調査を行う決心をした。私が路地裏生活に注目したのは、もともと近所付き合いのポリティクスに興味があったからであり、また実際に暮らした路地裏の場所が、私が住み始めて以来異なる時期に大きな、しかし微妙な変化を経験してきたからである。その変化は、経済的・政治的激震が台湾全土を包み、その影響が市井生活の隅々で感じられた1980年代以降に顕著となった、3つの都市の発展に関わるものである。

それらの3つの都市は三者三様に、そうした経済的・政治的荒波に対処してきた。概して、それらはともに本島の西岸で都市社会を実現しつつも、1980年代から90年代にかけてのそれぞれ個別の状況下で、異なる都市化の様態を示していた。政治と金融の中心地である台北は、トランスナショナルな競争に参入しながら、グローバル都市へと移行し始めた。新竹は、1980年代初めに郊外に国内初の先端技術を取り入れた科学公園を設置し、以来、長きにわたって立体的で複雑な空間的変化の過程を踏みながら、農村の風景や地域の自治網をほぼ一掃してきた。員林は、1980年代に独自の非中央集権的な工業化によって住民自治が発達していたが、通りやビル、さらには都市と隣接地域との間の移動の方法を近代化することで独自のアイデンティティー形成を図った。

これから論じる3つの路地裏は、そのような三者三様の文脈のもとに発展し、各々の路地裏を取り巻く近くの都市景観は異なる歴史的時期に整備された。これらの路地裏の場所はすべてメインストリートから少し離れた場所に位置し、メインストリートから路地裏に入るには、2、3度曲がって行かなければならない。私は、それら3つの路地裏のそれぞれにある、1つの特定の場所を観察したのだが、そこには、後述するような理由で人々が一日のある時間に集まってきた。

上述のように、路地裏は台湾の社会生活にとって重要な生活空間であり、私が観察したそれら3つの場所は、人々が滞在し交流するのにすぐれていた。そのような魅力の考察には、1980年代終わりからの台湾の都市化のプロセスが伴った隣人関係のダイナミズムに関する歴史的知識とともに、そうした都市の変化の傾向の只中で見られた日常的環境における個人の創造性と想像力を、より接近して把握することが求められる。本節と次節では、中心都市と



図1 台北、新竹、員林の位置



その他のタイプの都市空間における3つの路地裏の活動の共通性と差異とともに、そこに発生する住まう倫理の意義を検討する。

### (1) 路地裏A

台北の路地裏(以下、路地裏A)における社会生活は、戦前の植民地時代に日本人が、中国本土を追放された役人や教師を収容するために台北東部に新しい居住区域を設置したことに端を発する。戦後になると、戦争の終結の後で日本人が去った場所を埋めるように、中国本土から大量の移民が押し寄せた。路地裏が位置する地域は、1980年代初めまで、そうした中国からの移民と田舎からの移住者を受け入れ、そこにあった古い植民地時代の家屋は、台北で新たに設立された数々の産業のために鉄筋コンクリート造りのアパートに建て替えられていった。戦後の台北におけるこの地域の再建が断片的だったのは、国民党政府が大規模な都市の再建を主導することに消極的だったからである。しかしながら、そのような歴史的経緯により、図らずもその地域の通りの構造とシステムが温存された。数々のビルはたいてい破壊されて再建されていたが、にもかかわらず、この地域の通りと路地裏のほとんどが拡張されず、10年前と同じ姿を留めていた。

路地裏Aは、住宅と商業の機能を併せ持つ古い下町にある。そこでは路地裏が2つのタイプの社会生活の緩衝地帯として機能していた。台北の都市区画法による規制の導入は遅れていたが、それが実施された時は、数ある路地裏のうちの幾つかは、新法制下ではその存在が想定されていなかった様々な商店やショップですでに一杯になっていた。しかし、それらの店舗は既得権が与えられていたことにより残り、年を経るうちにその多くが台北の観光名所となった。台北のこの地域は、市役所後援の拡張プログラム、商業広告、創造的なインディペンダントの都市派文学の中で表象された路地裏の「人文景観」(人間的風景)によって、チェーン店、個人商店、アート・ギャラリーの数々が緊張をはらみながらも共存するファッショナブルな新興地域として詩的にブランド化された。

とはいえ、21世紀に入ってから10年間の私の研究が焦点を当てたのは、そのような地域での暮らしにどこか対応しきれず、そうした新しい「人間的」な風景に馴染めそうにない住民だった。この地域では、住民たち、店主たち、観光客の間に、交通、駐車、騒音、大気汚染、マナーといった問題が常に横たわり、衝突したり一時的な解消に甘んじたりしていた。公になった比較的大きな衝突以外にも、住民たちは日常的に細かい不便と迷惑に対処しなければならなかった。1つには、多くの住民にとって、ちょっとした用事のため表に出ることすら頭痛の種となっていたということがある。コミュニティ・スペースの商業化により、以前は住宅地であったこの場所に、着飾った人々が

ショッピングや観光に訪れるようになり、この場所を家と呼ぶ飾らない人たちは逆に場違いなよ者となってしまうていた。ジャコバン派が考えるような温かい眼差しに満ちた都市の安心感とは異なり、表に出る住民は観光客の冷たい視線から隠れなければならなくなったのである。

私が路地裏Aに注目し始めたのは、まさにそのような局面においてであった。拙著 (Chuang 2013) において、私は空間の商品化という現象に取り組み、上述の市政府による地域環境の改善支援のもとで住民がコミュニティ再建プロジェクトを立ち上げることによって近隣環境を回復しようとしたことを論じた。通りは政治的介入の舞台となった。この地域プロジェクトは全体的に、商業側が新世紀になって資本の導入による開発を強いたため、成功とはならなかった。しかし実際には、良き暮らしのための地域環境主義により、住民が集う安全地帯として様々な路地裏の片隅が生み出された。

路地裏Aにも、そのような集会地がある。住民のX氏は、地下鉄建設への反対運動を成功させ、駅をベースにした原案を示していた企業の計画を変更させ住宅地が破壊されるのを防いだ。X氏は地域の伝説となり、結局、政府公認の地域の長に選出された。彼のサクセス・ストーリーについては、別稿で分析している。本稿では、集団と空間のダイナミズムに関する彼の別の創造性を論じたい。

この創造的なダイナミズムの源は、何の変哲もない路地空間の連なりの真ん中に登場したお茶飲み場だった。その名声と新たに纏うようになったカリスマ性をもって、X氏は自分のアパートの前庭に人々を呼び寄せた。彼のアパートは1階にあり、その前には小さなオープン・スペースがあった。見知らぬ人たちがたくさんいる路地裏ではたいてい、住民は玄関のドアを常に閉めておくというルールを厳格に守っていた。

これに対して、X氏は日中ドアを開けっ放しにし、庭に大きな茶托を用意した。茶托の置かれた玄関は、田舎では突然の訪問者を迎える場としてよくある設備だが、空間に限られ、飛び入りの客自体が珍しい都市では、めったに見られないものである。したがって、開け放たれたX氏のドアは様々な効果を発揮した。それによって、路地裏と家の境界は曖昧となった。アパートの前庭は、路地裏に付随した空間として新たな意味を持つようになったが、家の一部としての性格が即座に失われることはなかった。準公共的なお茶飲み場が定着するには時間がかかった。X氏はまず親しい友人にお茶を飲みにくるよう誘った。そのうち、招待がなくとも、日常的に人々が繰り返し集まり始めた。通りすがりの知り合いの中には、陽気な雰囲気誘われて仲間に加わり、元の用事をすっかり忘れてしまう者もいた。

お茶飲み場完成への仕上げは、お茶の給仕の仕方にあった。手間がかかり、守るべき作法も多いことから「先人の茶法」とも呼ばれるウーロン茶の給仕は、

それ自体、芸術的であり非常に社交的でもある。X氏の前庭でお茶を淹れる際の熱湯によって周囲の熱も上がり、庭は多層的な社交の宇宙に変わっていく。やかんが鳴ると、散り散りだった友人たちが一か所に集まってきた。X氏を囲み、友情の星座が出来上がる。X氏のお茶の給仕方法と、それを飲んで楽しむ客の反応は、集団のダイナミズムの広がりを物語っている。お茶の香りは、まだ飲んでいない第二陣の客にまで届き、会話の話し声や笑い声が、壁の向こうの路地裏にまで響きわたった。

## (2) 路地裏B

新竹の路地裏(以下、路地裏B)は市の郊外に位置する。有名な科学公園の先端技術製造業が国内生産の成長に重要な貢献をし始めた1980年代後半から、新竹の郊外化が始まった。産業の技術商品のグローバル化が進展するにつれ、市も拡張し始めた。1990年代にはその地域にあったスラム街の大規模な解体が進み、新しくやって来たエンジニアや労働者が住むための高層アパートに置き換わった。以前は農業の風景が広がっていた郊外にも公園の拡張は及び、一旗揚げのために移住して来た人々が住まうゲート付きコミュニティが建っていった。そうした住人たちは都市空間の喧騒を一切好まない人々であった。

路地裏Bは、都市に見られる路地裏とは異なる。正確にはそれは、いくつかの稲田の真ん中に隠れた、ゲート付きコミュニティに通じる小路であった。1990年代から始まった新竹の郊外化は、2つの異なる道を辿った。1つは、大規模な退去と建て替えを伴うことの多い、計画的な都市の区画整備であり、もう1つは、人々それぞれの居住である。開発者ならば、田舎に不動産と土地を購入し、ゲートで仕切られた団地に替えていくことだろう。路地裏Bのコミュニティは2つ目のタイプに属する。それは、周りに田舎の家屋が点在する稲田の真ん中にぽつんと存在していた。道路と路地裏が入り組んだ場所であった。

人々は都市から、都会的な田園生活のようなものを夢見て、土地を買い、移住してきたが、実際の風景は多くの人々にとって奇妙なものであり、とりわけ日中には緑だったものが夜には闇に変わり、風景がブラック・ホールと化す様子には恐怖さえ覚えるものだった。詩的な意味でも、現実的な意味でも、この恐怖が監視の空間を具現化させることとなった。路地裏Bは2000年代半ばに造られたものである。移住した頃の頃、住民たちにお互いの顔を知る者はいなかった。この新しい団地以外の住民はたった一人であったため、日中でも路地裏に人はほとんどいなかった。新たに引っ越してきたそうした住民にとってその静けさは平穏をもたらすはずのものだったが、隣人同士が知り合いになる前は不安を喚起するものだった。やがて地域の条例に則って団地



の自治会が発足した。第1回の会合では、多くの住民たちが精神的不調や戸惑いを訴えていたのを私は目の当たりにした。その路地裏では、郵便配達人、ごみ回収業者、迷子になった訪問者によって引き起こされたささいな物音や動きにさえ人々は敏感になっていた。アパートの窓からは、いつもとは違う挙動をとる隣人たちにさえ目を光らせた。この五感を駆使した監視システムは十全とは言えなかった。2008年の世界的な金融危機の後、国内では窃盗が横行するという危機に直面し、それが地方にも影響を与えた。深夜に団地の予備発電システムが破壊され、高価な銅ケーブルが盗まれた。事件後、電子とウェブ・ベースのセキュリティー・システムが導入され、主な住居棟のスペースに入るためのドアはロックされ、磁気カード・キーがなければ開かないようになった。

逆説的に、そのような不安の時期がコミュニティ・ガーデンの提案の契機となった。まず、その年の中秋の名月の祭りの際に、自治会の後援により、他人同然だった住民たちが団地のポーチのロックされたゲートの後ろで、初めてバーベキュー・パーティーを開いた。お互いが初めて知り合いとなり、新たな友人たちの様々な人となりに接することになった。この新たな親交こそが、隣人たちが門を開け、未知の世界へと足を踏み入れるきっかけとなった。

穀物畑の景色、匂い、音は、このコミュニティの日常であった。しかし、住民たちが自分たちの手で本格的に耕作を始めたのは、住民の1人が、友人が所有する団地西の農地の一部の使用許可を求めてからのことだった。都市生活者が休日に田舎に出かけ、農家として共同耕作するこの国の流行に先立って、その地域では短い間コミュニティ・ガーデンが実現されていた。H夫人はそれを実現させたキー・パーソンであり、のちに自治会長に選ばれた。彼女は古参住民のT夫人と密接に連携し、団地住民たちを誘って、まだ荒地同然だった庭を耕し始めた。

耕作は、コミュニティの感覚と、それに基づいた故郷の風景の両方を形成するプロセスであった。自称農家の冒険的な人たちの手作業によって、およそ150平米にわたるこの土地の雑草が取り除かれ、鍬がかけられた。参加したどの家庭も手入れが可能だと感じられる範囲で一定の広さの土地を自由に得ることができた。それは、その農業地域の土壌が実際には固く(ゆえにそれまで放置されていた)、それを柔らかくするのは大仕事だったからである。

手を入れるべきもう1つの問題は水であった。農業地帯であったため、水路はどこでも常に水が流れるほどに整っていた。私たちが耕作していた畑にも水を供給する細い水路があったが、止水板によって水の流れが塞がれていた。それを取り除くには近くのプロの農家と交渉しなければならないので、私たちは当初バケツで畑に水を入れ始めた。その後、地元民のT夫人の交渉のおかげで、水は無事畑に流れるようになった。

耕作は歓喜に満ちていた。各家庭がそれぞれの嗜好でバラエティー豊かな植物を植えた。料理好きの者は、台所に備え付けの基本的な香味野菜であり、炒め物と一緒にして料理するのに適したお馴染みの野菜であるエシヤロットやバジルを植えた。その他私は、サツマイモの葉っぱ、白菜、トウモロコシ、カボチャ、ナス、ローゼルがあるのにも気づいた。バラ好きの私の妻はバラのいくつかに見入っていた。ヒマワリも、ある家庭が選んだものであり、それらの花が咲くと陽光を受け黄金に輝いていた。これらの様々な花は別々に分かれた苗床を取り巻くようにして数々の小道となり、さながら彩り豊かなパルテール庭園をつくりあげ、野菜畑と共存していた。新参農家は、負担と収穫を共有する術も学んでいた。同じ場所にいながら、植物と穀物、またそれらを育てる人々によって流れる時間は異なる。だが、その美しさは時と場所を超越していた。

### (3) 路地裏C

員林の路地裏(以下、路地裏C)は、1970年代の区画整理の結果、古い町に隣接して生まれた新しい市街地に位置する。台湾では、町という単位は工業化の妨げとなっていた。町は中小規模ビジネスがこの国の成長を支える上で非常に重要な役割を果たしてきたものの、政府が投資に消極的だったこともあり、その伸びは穏やかで曖昧なものであることが多かった。路地裏Cがある再区画地域も、新竹の多くの場合と同様に、まったく新しい街であるというよりも、付け加え程度のものであった。基本的に、町の外観は同じ体裁のまま残ったが、その機能の仕方は大きく様変わりした。例えば、バイクが町に溢れ、人々が町中を動き回る唯一の手段となった。この一人か二人の席を備えた自動交通手段は、人々の移動や交流、さらには通りの設計や建設の仕方を劇的に変えた。

路地裏Cは、30年前、両側に沿って新しい家屋が建設される形で新興地域に造られた。その路地裏と家屋はその地域の中でも初期に建てられたもので、稲田の真ん中にはそれらがわずかにしか残っていない。今日まで、路地裏Cは通りを基盤とした都市風景に囲まれている。私は2000年初めから3年間、別の路地裏への抜け道がある路地裏Cの片隅に自然発生した、10世帯から成るご近所と生活を共にした。

10世帯は、空間として成り立っているだけでなく、生活のまとまりともなっており、それはとりわけ母Wの尽力のおかげであった。台湾の文脈ではこのような町には、台北や新竹によくみられるような隣人組織のような自治による組織や委員会はないのが普通である。しかし、母Wと退職した彼女の夫は当初から、この自然発生した生活圏のリーダーになった。路地裏Cは交通量が少ないため、母Wの家の前は社交空間となった。朝には、近所の人々が食べ物を

買うために、母Wの家の前に止まっている朝食の屋台に集まり、少しお喋りをしたのち再び、学校や会社に出かける準備をしている配偶者や子供たちの元へまた戻っていく。屋台のオーナーは古くからの顔見知りで、地元のやり方を熟知していた。夕暮れ時には、ゴミ収集車が決まった時間に来ると、隣人たちは玄関口で待ち構え、ゴミで一杯のビニール袋を放り投げる。ゴミ収集の美学については、文化批評家や理論家も言及しており、地域差のさらなる考察が期待される。良き市民としての日課を果たし終えると、隣人たちは再び母Wの家の周りに集まる。朝のせわしい中でのおしゃべりとは異なり、夕方の会話はより打ち解けたとりとめのないもので、誰かが夕食に帰るまで続く。

町の生活は、単に感情のこもった交換を交わすだけでなく、時には計算に基づく抽象的で、形式主義的な側面を持つ。路地裏Cの片隅に駐車する方法をめぐるやり取りはその一例である。路地裏Cが造られたのは1970年代半ばであり、当時は今のように台湾の都市で自動車文化が席卷するとは誰も想像していなかっただけに、駐車は路地裏Cにとって悩みの種になった。路地裏は幅6メートルの広さに過ぎず、片側にしか駐車できなかった。さらに、車が駐車すると一方通行になってしまうのだが、この地域では一方通行のルールを公式に導入することは簡単ではなかった。しかし、路地裏Cの住民たちは公認を得ることも、集まって話し合いを持つこともなく、暗黙のうちに一方通行を実現させた。暗黙のルールが出来上がり、路地裏Cに入るためになんとかしようとしていた住民たちもそれに従った。進入ルートは、その車が路地裏に入るごとに決める方向によって変わった。この幾何学的な抽象主義は、車の進み方だけでなく、駐車場所にも及んだ。「車のプール」とも呼ぶべき路地裏Cの端で、母Wは10世帯分の駐車スペースを計算した。車持ちの住民が新たに加わったり、住民が新車を調達したりするごとに、計算がやり直された。

## 住まう倫理

3つの路地裏は変貌し、最終的には消失することとなった。こうした変化からくる住民たちのトラウマ的な経験は、住まう倫理について再考させる。ここで言う倫理とは、人間の行為に課せられた既成の規制や規則ではなく、ある判断や選択に基づいた行いがもたらす結果への配慮を意味する。私は、ティム・インゴルド、ポール・ラビノウ、T.M.S. イブンスという3人の人類学者の近代生活論から、この住まう倫理の概念に至った。彼らの考え方が、私が場所の変容プロセスを研究するきっかけとなった。

インゴルドは、その画期的な著書『環境の知覚』(Ingold 2002)の中で、マルティン・ハイデガーから借用した住まうという観点の意義を詳説した。

ハイデガーは、有名な「建てる、住まう、考える」という論考において、「住まうことが可能である限りにおいて、建てるということが可能となる」(Heidegger 1977: 338)と論じた。インゴルドはこれに感化され、住まうという観点を提案することで、「世界は住まわれる以前に作られる。言い換えれば、住まう行為は世界構築の行為の後になされる」という一般的な見方に終止符を打とうとした(Ingold 2002: 179)。対照的に、住まうという観点からすれば、「構築の活動——土を掘り、建物を建てること——は、世界に住まうことの一部であり、私たちの生き方の一部」(Ingold 2002: 185-186)にほかならない。インゴルドにとって、家は成長する有機体であり、したがって「人間が環境の中に住まう限り、建設とは継続的に続くプロセスである」(Ingold 2002: 186)。

この住まうという観点には、1つの倫理の形が示唆されている。住まう倫理とは、そのような成長のプロセスを精査することである。別の拙論(Chuang 2015)で述べたように、ラビノウが論じたフーコーの自己への配慮という考え方が、この場所の倫理を解きほぐす糸口となる。ラビノウは、フーコーの自己への配慮を、「生涯続く外的事象との戦いに備えた一連の練習」(Rabinow 2003: 9)として捉えた。私はラビノウの見方に多少修正を加え、「場所への配慮とは、外的事象に継続的に立ち向かえるよう、コミュニティを媒介として個々人が協力して行う一連の練習」だと主張したい。というのも、場所は自己とは切り離せない一部であり、その逆も真だからである。人間と人間ではないものに関わるそのような紐帯の在り方が、住まう倫理の基礎となるのだ。

文化人類学者のイブンスは、倫理の優位に大いなる注目を寄せている。彼にとって人類学とは倫理であり、人間が他者に応答する際の判断、選択、決断を研究する学術領域である。倫理は、人間を自律性の問題としてみるよりも他律性の問題としてみる方向に向かわせるというのである。倫理とは「他者からの懇願であり、それは根本的に意思決定といった類のものに限定されない。むしろ、どんなことにでも関わる日常的で人間ならではの決断という行為に集約されるものである」(Evens 2009: xxi-xxii)。

したがって、これまで述べた路地裏の活動と空間の消失は、実際の生活における住まう倫理を表している。住民は空間の荒廃を悲しみのうちに受けとめたが、消失の美学は、物理的な意味での空虚ではなく、新たな力学をはらんで変容し続けるところにある。これまでは、3つの路地裏では、それほど明白ではないものの、個々人の日々の選択と決断によって隣人関係が変化することにつれて、空間構成も変化してきたことを見てきた。ここからは、そのような日々の営為の原因と結果、すなわち空間の変容と場所にまつわる感覚の変化の原因と結果を論じていく。

X氏、T氏、母Wは、3つの路地裏の自治組織から生まれたリーダーであった。X氏はのちに地域の事務局を運営し、その長に選ばれた。T氏は団地の

自治委員会の議長となった。母Wは、役職こそなかったものの、その声は地域に多大な影響力を持っていた。お茶飲み場、コミュニティ・ガーデン、そして「車のプール」の形成は、地域における名声と影響力を空間的に具現したものであり、環境として創造したものだと考えることができる。3人の名士の下でのこの空間形成は拡張しながら、コミュニティ全体に及んでいった。X氏は近隣を見回るチームを結成し、毎晩パトロールがてら、その日ごとに異なるメンバーの誰かの店の前に集まり、至る所がお茶飲み場と化した。T氏の委員会は、庭づくりのノウハウを持ち帰り、団地のアトリウムを庭に仕立てた。彩りに満ちた環境で、バーベキュー・パーティーが開かれた。母Wは「車のプール」で続けて働き、郵便の受け取り、合いかぎの管理、植物の水やり、猫の餌やり、舗道の掃除などを行うことで精力的に隣人たちを手助けした。加えて、就寝前に散歩したり朝早く起きたりするのが好きな彼女の夫も、路地裏の不審な動きを監視する目としての役割を果たしていた。

とはいえ、これらの地域の感情で繋がれた交流の輪の中では仲違いの火種もくすぶっていた。リーダーたちの権力と影響力が頂点に達すると、敵からはクーデターのような反応が起こった。それぞれのケースのポリティックスを詳述する紙幅はここにはないが、反対運動が空間の変容の連鎖反応を引き起こし、最終的にお茶飲み場、コミュニティ・ガーデン、車のプールの消失をもたらしたことだけは言及しておきたい。

X氏は、選挙の勝利から一年足らずで支援者の信頼を失う。内部の軋轢が深まる中、Y氏が対抗勢力の盟主に躍り出た。X氏からY氏へと忠誠を変えることを決断したメンバーたちがお互いのアパートに集まるようになった。住宅でのこの寄合のそもそもの目的は、道で出くわす対抗勢力同士の気まずさを避けることであった。時が経つにつれ、彼らの考え方は偶然にも、台北近郊の「高級住宅」による文化的向上に相当するものとなった。通りに人影はなく、私が最後に見た時には、X氏のお茶飲み場は消え去り、そこへの扉も再び閉ざされていた。

T夫人は、ある日の会議で新しい住民のSから皮肉と偽善を批判され、面目を失った。その一年前、T夫人は、引越して間もないSとすぐに仲良くなり、S宅は団地で初めて内装を改装した家となり、ホーム・パーティーにとって格好の場所になった。招待を期待する住民たちの間で、彼女の人気はうなぎ昇りとなった。したがって、T夫人の人気の墜落は、作為的な住民への根回しの結果として予想されたものだった。Sは、Tの辞任後議長となり、住民との交流を断った。コミュニティ・ガーデンはやがて廃止され、毎年恒例のバーベキュー大会も中止された。新議長の好みに合わせ、植物も植え替えられた。

母Wは、隣に住むMが家をさながら要塞に変えていく決定に対処できず、求心力を失った。路地裏に越してきたばかりのMは、築およそ40年の新居



の改築を始めた。しかし問題は、それが路地裏で流行りの「要塞化」だったことだ。つまり、床面積を広げ、部屋数を増やし、なによりも駐車用のガレージを確保するため、家の正面と裏庭を屋根と壁と窓で覆ったのである。工事で生じる騒音や壁の亀裂に加え、ガレージ付の新しい要塞建築は上述した車のプールの時代に終止符を打つものであった。母Wの名望は、路地裏の片隅で駐車スペースを確保しながら「車のプール」を管理することで保たれていた。だが、ガレージによって路地裏の道路のスペースは根こそぎ私有化され、かつての車のプールの在り方に引導が渡されることとなったのである。

### 暮らしの環境主義

本稿を締めくくるにあたり、インゴルドの暮らしの環境主義に立ち返ろう。地球規模の環境主義という問題を考える際、本稿で描き出した路地裏生活は重要な問題となりうるだろうか。人間中心的で、グローバルな暴力に満ちた不確かな現代 (Sassen 2014; Tsing 2015) に対して、市井の人々の何気ない日々の決断や、それが生活環境にもたらす結果に特徴的な住まう倫理は、なんらかの意味を今なお持ちうるだろうか。インゴルドはここでもまた、そうした問いを考える上で出発点となる。彼は、「地球と球体——環境主義のトポロジー」という論考の中で、自身が「地球の環境主義」と呼ぶ、広く知られたグローバルな環境言説を退けようとした。それは、「環境を、私たちの暮らしを取り巻くものとは懸け離れた、自足した世界として捉え、その中心に立つ人間を周縁化し、最後には全員もろとも駆逐してしまう」(Ingold 2002: 209) と言うのである。これに対しインゴルドは、「住まわれる世界の構成要素との実践的で認知的な関わりに基づく」地域的観点を重視した、環境主義の球体的想像を唱えた (Ingold 2002: 216)。

本稿では議論をさらに一歩進めたい。本稿は、路地裏という場の文脈における隣人同士の生活交流の事例を検討することによって、住民の日々の行動と決断を考察するものである。インゴルドの観点から言って、そうした行動や決断が住民たちの生活世界に重大な影響を与えうるというのが私の論である。これが、私が「暮らしの環境主義」と呼ぶものであり、インゴルドの概念である「暮らしのエコロジー」(Ingold 2002) を微調整した考え方である。自らの経験の中心から「そこに住む人々の注意は、知識と理解を求めて、どんどん深く世界へと注がれていく」(Ingold 2002: 216) とインゴルドは論じる。私としては、そのような、世界の深みへの注意は、知識と理解の探求であるのみならず、変化をも引き起こすと指摘しておきたい。本稿のはじめに引用したトニ・モリスン (Morrison 2004 [1992]: 51) の言葉が示すように、そのような変化は、

目に留まることのない些細なことから始まるが、その結果を私たちは骨身で感じるようになる。

本稿では、葛藤の事例をいくつか分析することにより、異なる生活世界の形成、変容、消失の倫理、すなわち私の言葉で言う「住まう倫理」を示し、それによって増幅的に生み出される身体的、空間的な効果を明らかにしてきた。そのような葛藤の場でこそ、住まう倫理は都市闘争、すなわちアンリ・ルフェーヴルがその画期的な論考で言うところの、都市への権利を獲得するための闘い (Lefevre 1991) の前線となっていることがわかる。ルフェーヴルにとって、日々の暮らしとは、「生産、消費、流通、住居の社会経済的な組織化が強いる強固なリズムとプロセスの間の軋轢の場であり、舞台であり、争点である」(Lefebvre 1991: 73)。したがって、日常生活の批評とは、人々が日々の行為の中でとる判断、選択、決断がいかにそのような社会経済のプロセスに介入する可能性があるかを探究することだといえる。本稿の事例は、漠然とした結果ではあるものの、そのような介入が即時的に身近で起こっていることを示している。それゆえに、日々の生活圏は希望の空間ともなっており、グローバルな規模で暮らしの観点が希薄になりつつある今日においてはとりわけ、研究者が目を向けるべき重要な点なのである。

#### 参考文献

- Appadurai, Arjun (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Appleyard, Donald (1981) *Livable Streets*. Berkeley: University of California Press.
- Bauman, Zygmunt (2009) *Does Ethics Have a Chance in a World of Consumers?* Cambridge: Harvard University Press.
- Casey, Edward (1997) *The Fate of Place: A Philosophical History*. Berkeley: University of California Press.
- Castells, Manuel (1996) *The Rise of the Network Society*. Oxford: Blackwells.
- Chuang, Ya-Chung (1996) *Writings on Cities*. Oxford: Blackwell.
- Chuang, Ya-Chung (2004) *Rhythmanalysis: Space, Time and Everyday Life*. London: Continuum.
- Chuang, Ya-Chung (2013) *Democracy on Trial: Social Movements and Cultural Politics in Postauthoritarian Taiwan*. Hong Kong: Chinese University Press.
- Chuang, Ya-Chung (2015) "The Care of Place: Contesting New Urbanism in Postauthoritarian Taiwan," in Kyonosuke Hirai ed. *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Evens, T.M.S. (2009) *Anthropology as Ethics: Nondualism and the Conduct of Sacrifice*. New York: Berghahn.
- Feld, Steven and Keith H. Basso eds. (1996) *Senses of Place*. Santa Fe: School of American Research Press.

- 
- Gehl, Jan (1987) *Life between Buildings: Using Public Space*. New York: Van Nostrand Reinhold.
- Gupta, Akhil and James Ferguson (1997) "Beyond 'culture': Space, Identity, and the Politics of Difference," in Akhil Gupta and James Ferguson eds. *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*. Durham: Duke University Press.
- Heidegger, Martin (1977) "Building Dwelling Thinking," in *Basic Writings*. New York: Harper & Row.
- Ingold, Tim (2002) *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. London: Routledge.
- Jacobs, Jane (1992 [1961]) *The Death and Life of Great American Cities*. New York: Vintage.
- Lefebvre, Henri (1991) *The Production of Space*. Oxford: Blackwell.
- Low, Setha (1996) "Spatializing Culture: The Social Production and Social Construction of Public Space in Costa Rica." *American Ethnologist* 23(4): 861–879.
- Low, Setha (2000) *On the Plaza: The Politics of Public Space and Culture*. Austin: University of Texas Press.
- Low, Setha (2014) "Spatiality," in Donald M. Nonini ed. *A Companion to Urban Anthropology*, Malden: Wiley Blackwell.
- Low, Setha & Denis Lawrence-zuniga eds. (2000) *The Anthropology of Space and Place*. Malden: Blackwell.
- Lynch, Kevin (1960) *The Image of the City*. Cambridge: The MIT Press.
- Morrison, Toni (2004 [1992]) *Jazz*. New York: Vintage.
- Nonini, Donald M. ed. (2014) *A Companion to Urban Anthropology*. Malden: Wiley Blackwell.
- Rabinow, Paul (2003) *Anthropos Today: Reflections on Modern Equipment*. Princeton: Princeton University Press.
- Sassen, Saskia (2014) *Expulsions: Brutality and Complexity in the Global Economy*. Cambridge: Belknap.
- Tsing, Anna (2015) *The Mushroom at the Edge of the World: On the Possibility of Life at Capitalist Ruins*. Princeton: Princeton University Press.
- Whyte, William H. (1980) *The Social Life of Small Urban Spaces*. New York: Project for Public Spaces.